

若年層の方言使用と方言意識

—愛知県豊明市の中学生を対象として—

近 藤 紗 耶

1. はじめに

近年、テレビなどのマスメディアの影響やインターネットの普及が共通語化を押し進め、若年層における方言の衰退が進んでいると指摘されている。しかし、地域に根付いた方言は今なお日常生活で用いられ、親から子へと受け継がれている。

本論文では、言語発達の過程にある中学生を対象に方言の使用度や理解度、方言に対するイメージ調査などを行い、若年層における方言の実態を明らかにした。同じ愛知県の方言でも、中学生が使用するものとししないもの、方言と認知しているものとしていないものを取り上げた。また、方言使用にどのような意識が関係しているのか、言語環境がどう関わるのかについても考察した。

2. 調査の概要

2.1. 調査地点

愛知県は、日本の方言を東西に分けたときにその接触地帯に位置し、そこに中部方言独特の要素も含んでいるため、複雑な方言を形成している。さらに県内は尾張地区と三河地区に大きく二分することができ、その方言もまた、尾張方言と三河方言に分けることができる。

今回調査を行った愛知県豊明市は、名古屋市の東隣に位置する人口約7万人の市である。豊明市は尾張地区に属してはいるが、すぐ隣の市は三河地区のため、通勤、通学などで日常的に三河地区との間で人の行き来が行われている。

2.2. 調査方法

豊明市内の学習塾3箇所に依頼し、そこに通う中学生を対象にアンケート調査を行った。その中から豊明市出身の男子111名、女子87名の計198名を調査対象とした。調査項目は、対象者の言語環境、方言意識、方言使用の3つの観点から設定した。

言語環境については、対象者が言語発達の過程にある中学生ということを考慮し、対象者本人の出身地だけでなく両親や同居する祖父母の出身地を質問項目とした。その他に、地域の方言に触れる機会の程度についても項目として追加した。方言意識の観点からは、出身地やその方言に対する好悪の意識を問う項目や、方言全体に対するイメージを問う項目を作成した。方言使用に関する項目の語彙は、愛知県や中部地方の方言と言われているものを22語選定した。語彙の選定においては、筆者が学生時代に実際に使用していたものから、現在ではあまり使用されていないと思われるものまで幅広く対象とした。

3. 調査結果の分析と考察

3.1. 中学生の方言使用の実態

3.1.1. 場面による使用度

まず、対象者自身が方言を使用するかを質問した。そして「よく使う」「たまに使う」と回答した対象者には、場面ごとの方言使用について回答してもらった。選択肢は、方言を「使う」「使わないようにする」「絶対使わない」「わからない」の4つとした。場面には次の6つを設定した。

- A. 家族と家でテレビを見ながら話をしているとき。
- B. 学校の友達と休み時間に話をしているとき。
- C. 担任の先生に授業中に質問をするとき。
- D. クラスで話し合いをするとき。
- E. 共通語を話す見知らぬ人に地元で道を聞かれたとき。
- F. 東京で見知らぬ人に道を聞くとき。

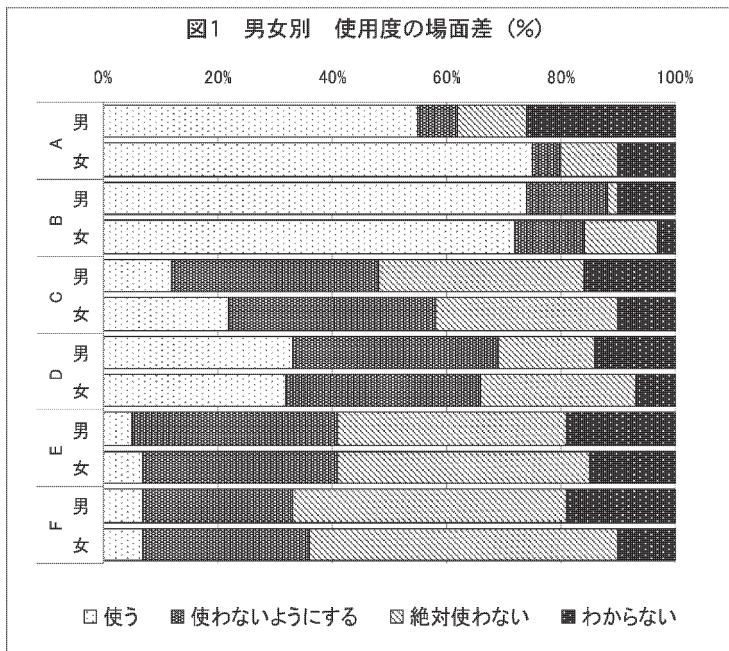
自身が方言を使用すると思うかについては、「よく使う」「たまに使う」と回答した対象者は全体の43%であった。次に、方言を使うと回答した85名に、上記の場面における方言使用について質問した。

場面 A, B においては、「使う」という回答が最も多くなった。A の場面では64%、B の場面では71%の対象者が方言を使うという結果となった。若干ではあるが、家族よりも友人に対しての方言使用が多いということがいえる。次いで、「使う」との回答が多かったのは場面 D であるが、こちらは「使う」と「使わないようにする」でほぼ同数に分か

れる結果となり、同じ友人相手でも話し合いなどの改まった場面においては方言使用を抑える傾向にあることがわかった。場面 E, F では、どちらも半数近くが「絶対に使わない」と回答し、6つの場面の中で最も使用人数が少なくなった。

しかし男女の結果を比較してみると異なる傾向が見られた。まず、対象者自身が方言を使用すると思うかという項目について、「使う」と回答したのは男子が38%、女子が49%となり、男子の方が、自分は方言を使用していないという意識が高いことがわかった。

次に、方言を使用すると回答した男子42名、女子43名の場面による方言使用の結果を図1に示す。男女で使用に大きく差が出たのは場面 A である。「使う」と回答した対象者の割合が男女で20%差があり、家族との会話の中では女子の方が方言を使用するという結果となった。一方で、場面 B の学校の友人との会話で方言を使用するかという点においては、「使う」の割合は男女であまり変わらないが、「絶対使わない」の割合は女子の方が10%以上高くなった。場面 D, E, F でも、同様の傾向が見受けられ、友人相手や改まった場面においては男子より女子の方が方言の使用を抑えるということがわかった。また、A, B を比較すると、女子はあまり使用割合に変化がないのに対し、男子は20%以上の差があり、同じくだけた場面であっても、家族と友人という相手の違いによって、



その方言使用にも違いが出る事が確認された。

3.1.2. 方言語彙の使用度と認知度

方言の使用度と認知度について問う項目とした語彙は、選定の際に筆者が予想した使用度と認知度の高低で表1にまとめた。下線部が方言で、()内は共通語表現である。以下の22語それぞれについて、「使う」「ときどき使う」「以前は使っていた」「意味はわかるが使わない」「意味がわからないので使わない」という5段階で使用度を回答してもらった。また、その語が方言と知っているかどうかについても質問した。

表1 調査語彙一覧

	認知度高い	認知度低い
使用度 高い	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>～だ</u>で (だから)・<u>机をつる</u> (運ぶ) ・<u>しとらん</u> (していない) ・<u>ほかる</u> (捨てる)・<u>えらい</u> (疲れる) 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>放課</u> (休み時間)・<u>ドベ</u> (最下位) ・<u>ご飯をつける</u> (よそう)・<u>鍵をかう</u> (かける) ・<u>B紙</u> (模造紙)・<u>しゃびしゃび</u> (水っぽい) ・<u>トキントキン</u> (尖っている状態)
使用度 低い	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>ケッタ</u> (自転車)・<u>いこまい</u> (行こう) ・<u>おそがい</u> (怖い)・<u>びたびた</u> (びっしょり濡れた状態)・<u>もうやっこ</u> (はんぶんこ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>ピー</u> (チョコ)・<u>あらすか</u> (ない)・<u>ばりか</u> <u>く</u> (ひっかく)・<u>～まるけ</u> (～まみれ) ・<u>まわし</u> (準備, 支度)

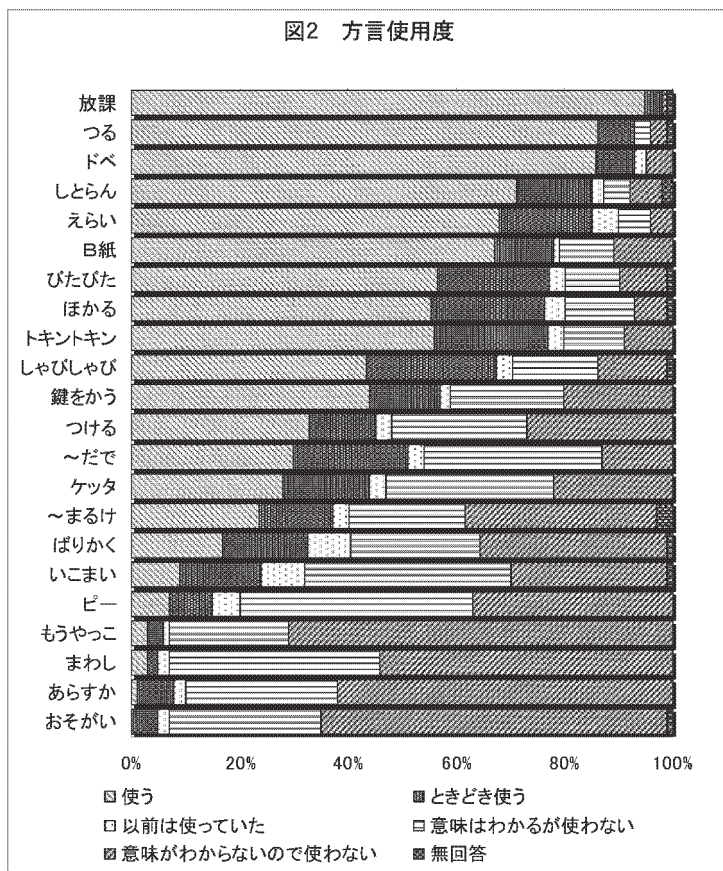
使用度についての結果は図2のようになった。

22語の内、「使う」「ときどき使う」と回答した対象者が半数以上なのは、図2の「放課」から「～だで」までの12語である。その中でも特に、「放課」「机をつる」「ドベ」の3語は使用率が90%前後と、かなり高い数字となった。反対に、「あらすか」「もうやっこ」「おそがい」「まわし」の4語の使用率は5～8%と低い数字となった。

全体的に見てみると、比較の予想通りの結果となった。「放課」「机をつる」など、筆者も中学時代に当たり前のように使用していた語彙が、今なお多くの中学生に使用されていることがわかった。これらの語彙は学校内で教師も使用しているという点で、生徒の使用率の高さにつながったと考えられる。反対に、「まわし」「おそがい」などは古くから愛知県の方言として知られていたものであるが、現在では中学生にはほとんど使用されていないことがわかった。

認知度については、半数以上が方言と知っていると回答した語彙は「～だで」「ケッタ」「いこまい」「おそがい」の4語にとどまった。反対に、「B紙」「ドベ」「トキントキン」は方言と認知している人がそれぞれ15%前後とかなり低く、多くの対象者が方言だとい

図2 方言使用度

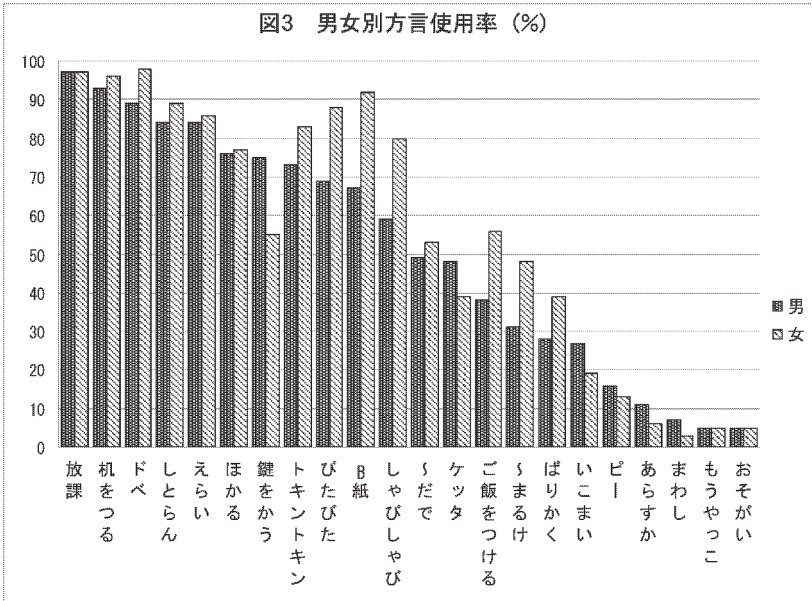


う事実を認識していない結果となった。傾向としては、「放課」「B紙」「えらい」など、学校や日常の中で使われる語彙の認知率が低くなった。使用率と同様、学校というある程度公の場で、教師までも当然のように使用しているという点が、方言だという認識を与えない要因である考えられる。使用率との関連で見ると、使用率の高い語彙は認知率が比較的低くなるという結果となった。ただし、例外として「机をつる」は、使用率、認知率共に高い数字となった。

使用率の結果を男女で比較したのが図3である。

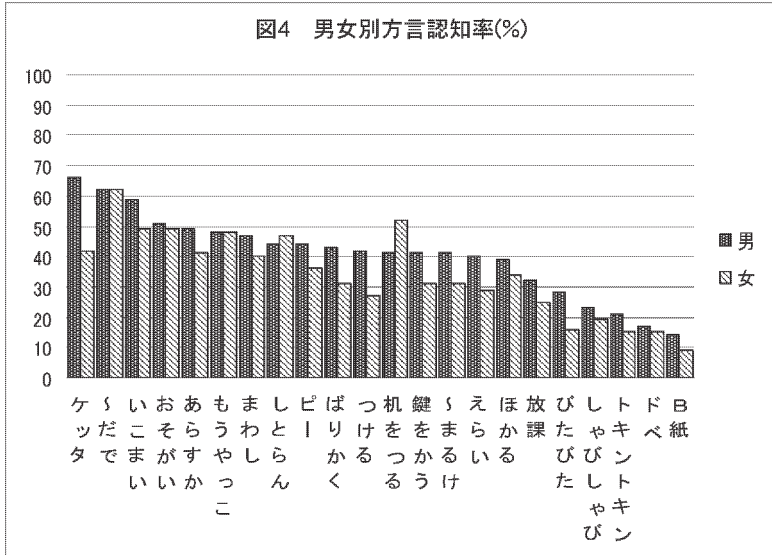
全体的に見てみると、男子よりも女子の方が「使う」「ときどき使う」の割合が大きいことが図からわかる。

図3 男女別方言使用率 (%)



特に、「B紙」「びたびた」「しゃびしゃび」「ご飯をつける」などは男女で大きく差が出ている。しかし、全体としての使用率が低い「ピー」「あらすか」「まわし」「もうやっこ」などの語彙に関しては、男子の使用率の方が高くなった。それらの語彙では、女子の「意味はわかるが使わない」の割合が大きくなる傾向が見られた。女子の方が、意味を理解していても周りが使用していない場合には自分も使用を控えようとする意識が働くと予想される結果となった。

認知度の結果を男女で比較した図4を見てみると、ほとんどの語彙で男子の方が女子よりも認知率が高くなっていることがわかる。特に「ケッタ」は、男子が66%なのに対し、女子は42%と、その認知度に20%以上の差が生じた。山田(2007)では、「ケッタ」と、同じく自転車を意味する「チャリ」の2語の使用について調査をしている。その中の回答者の証言の中には、「ケッタは男が使う」という意識のものがある。使用率は男女で10%程の差しかなかったが、認知率の点にそういった男子の言葉というイメージが現れているのかもしれない。



3.2. 方言使用と言語環境

3.2.1. 言語環境の実態

中学生の言語形成には家族環境が影響を与えると予想される。そこで、調査票では「豊明市内」「豊明市以外の愛知県内」「愛知県以外の都道府県」「その他」「わからない」の5つの選択肢を用意し、対象者に同居する両親、祖父母（曾祖父母含む）の出身地を回答してもらった。結果は、両親や祖父母に、調査地域である豊明市出身者がいる対象者は全体の41%、82名となった。また、豊明市を含む愛知県出身者がいる対象者は全体の87%、172名となった。

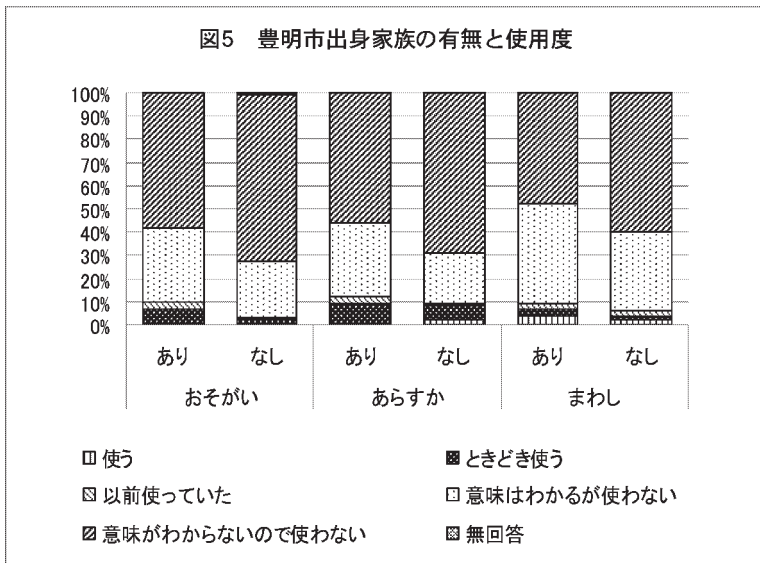
また、方言使用や方言意識においては、方言をよく使用する高齢者との接触が影響として考えられる。祖父母や地域の高齢者と話をするかという質問には、「よくする」「ときどきする」と回答した対象者が、それぞれ20%、48%となった。反対に、「あまりしない」「全くしない」と回答したのは、25%、5%となり、全体の70%近くが高齢者との接触があるということがわかった。

3.2.2. 家族環境と方言使用度

同居する家族が方言使用に影響を与えるかどうかを分析考察するため、同居する両親、祖父母に豊明市出身者がいる対象者と、いない対象者の方言使用率を比較した。

同居する両親や祖父母に豊明市出身者がいるかないかで使用率に差が出たのは22語中16語となった。その内、豊明市出身者がいる場合の方が使用率が高くなったのは9語と、あまり多くなかった。また、その差も大きなものはなく、差が10%を超えたのは「えらい」の1語のみであった。

しかし、いくつかの語彙で特徴として見受けられたのは、使用率が同じでも豊明市出身者がいる場合の方が「意味がわからないので使わない」の割合が低いということである。その特徴は、特に全体として見たときに使用率の低い、「おそがい」「あらすか」「まわし」に見られた。それらの語彙の使用度を示したのが図5である。「おそがい」は、「意味がわからないので使わない」の割合が豊明市出身者ありとなしとでは14%の差がある。「あらすか」、「まわし」もそれぞれ13%、12%の差が見られる結果となった。中学生自身は使用しない方言語形であっても、家族がその語形を使用していることでその意味理解につながっていると考えられる。

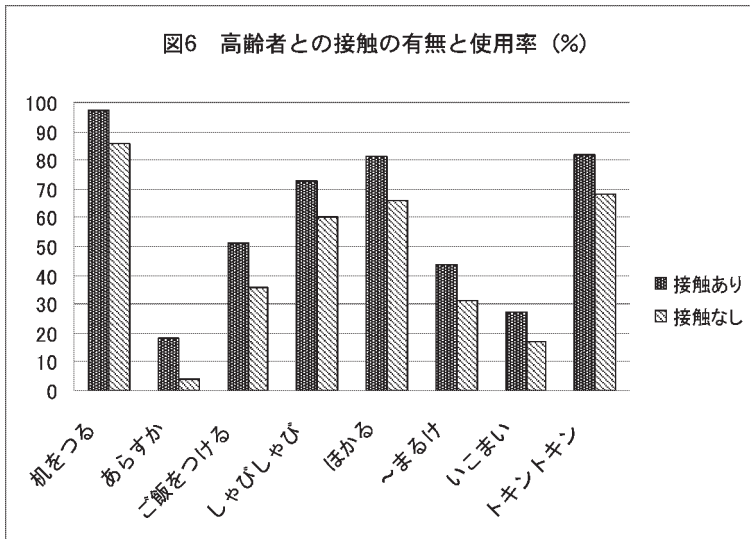


3.2.3. 高齢者との接触度と方言使用度

高齢者との接触の有無が方言使用に影響を与えているかを分析考察するため、祖父母や地域の高齢者と話をするかという間に対して、「よくする」「ときどきする」と回答した対象者と、「あまりしない」「全くしない」と回答した対象者との方言使用率を比較し

た。

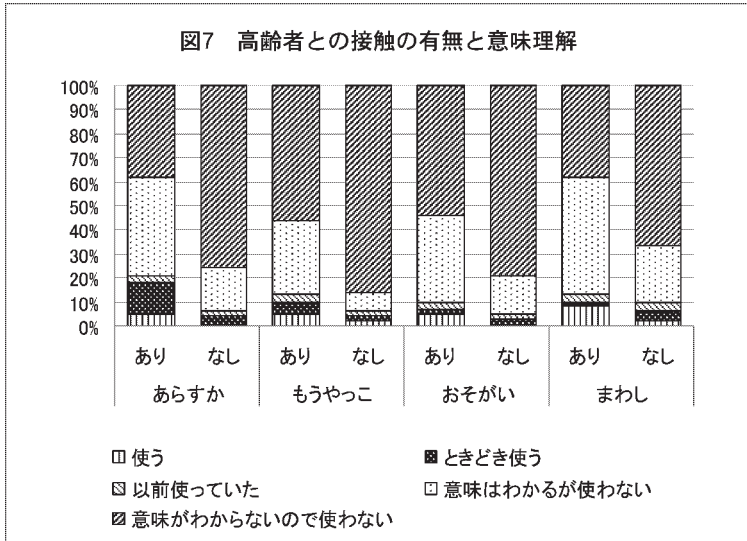
高齢者との接触の有無で使用率に差が生じたのは22語中21語であった。その内19語で、高齢者との接触がある対象者の方が使用率が高くなった。10%以上の差が出た語彙は図6に挙げた「机をつる」「あらすか」「ご飯をつける」「しゃびしゃび」「ほかる」「～まるけ」「いこまい」「トキントキン」の8語である。「しゃびしゃび」「ほかる」「トキントキン」などは比較的使用率の高い語彙であるが、これらは高齢者との接触の有無によって15%近い使用率の差が見られる結果となった。



また、高齢者との接触の有無による使用度の特徴として見受けられたのは、使用率に大きな差のない語彙でも、高齢者との接触ありの場合の方が接触なしの場合より「意味がわからないので使わない」の割合が少なくなるという傾向である。この特徴は、特に図7に示したような、全体で見たときの使用率が極めて低い語彙、「あらすか」「もうやっこ」「おそがい」「まわし」に顕著に見られた。

まず、「あらすか」は高齢者との接触がある場合は「意味がわからないので使わない」の割合が38%であるのに対し、接触がない場合は76%と、その差が38%と大きく開いている。「もうやっこ」も接触の有無によって30%の差がある。「おそがい」、「まわし」もそれぞれ35%、29%の差が出る結果となった。

高齢者との接触がある対象者は、自身は使用しなくても、意味は理解しているという



語彙が多いということになる。高齢者の影響は、方言使用よりも方言理解に現れる傾向があるといえる。これは、前述の家族環境による比較でも見られた特徴であるが、高齢者との接触の有無による比較の方が、より明確に差が出る結果となった。

3.3. 方言使用と方言意識

3.3.1. 方言意識の男女差

まず、出身地とその方言に対する好悪意識についての調査結果を男女別に記す。

表2 「出身地のことが好きか。」 (%)

	好き	やや好き	どちらとも言えない	やや嫌い	嫌い
全体	43	32	20	4	1
男	38	32	21	6	3
女	48	32	20	0	0

表3 「出身地に方言があると思うか。」(%)

	ある	少しある	あまりない	全くない	わからない
全体	25	31	32	5	7
男	20	26	38	7	9
女	31	38	24	2	5

出身地に対する意識としては、全体の75%の対象者が好意的な見方をしているという結果となった。また、出身地に方言があると思うかどうかという質問においては、56%の対象者が出身地に方言が存在すると意識しているという結果が出た。男女別で見ると、共に出身地に好意を持っている割合が高い一方で、「やや嫌い」「嫌い」と回答した率が男女で10%近くの差がある。また、出身地に方言があると認識しているかどうかの点では、女子の方が男子より20%以上認識率が高くなった。

次に、出身地に方言が「あると思う」と回答した対象者111名に対して、出身地の方言が好きか、出身地の方言を残していきたいと思うかを質問した。その結果を記す。

表4 「出身地の方言が好きか。」(%)

	好き	まあまあ好き	どちらでもない	やや嫌い	嫌い	無回答
全体	10	32	44	5	3	6
男	6	39	41	2	6	6
女	13	27	46	7	0	7

表5 「出身地の方言を残したいと思うか。」(%)

	思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない	わからない	無回答
全体	23	30	28	4	14	1
男	24	25	33	4	14	0
女	23	36	23	3	13	2

方言が「好き」「まあまあ好き」と回答したのは合わせて40%程度で、出身地に対しての場合と比べて低い数字となった。方言については50%以上が「残したい」と考えていることがわかった。この結果を男女で比較してみると、出身地の方言に対しては、「とて

も好き」「まあまあ好き」の割合を合わせた数字は男子の方が若干高い。しかし、「とても好き」単独の割合で見ると、女子の割合が男子の割合の倍となっている。また、「嫌い」の割合が男子の方が女子より6%高くなっている。方言を残したいかどうかについても、女子は58%が「残したい」と回答したが、男子は49%と、女子の方が比較的出身地の方言に対して好意的であることがうかがえる。

次に、出身地の方言に限らず、日本語の“方言”というものにどのようなイメージを抱いているかを質問した。質問は表6のような形式とし、方言に関しての対になるイメージに対して、対象者の意識がどちらにより近いかを回答してもらった。項目は、“都会らしい/田舎くさい”“品がある/品がない”“使いやすい/使いにくい”“きれい/きたない”“温かみがある/冷たい”“丁寧/乱暴”“落ち着く/落ち着かない”“おしゃれ/ださい”“やわらかい/きつい”の9つとし、Aがプラスイメージ、Bがマイナスイメージとなるよう設定した。

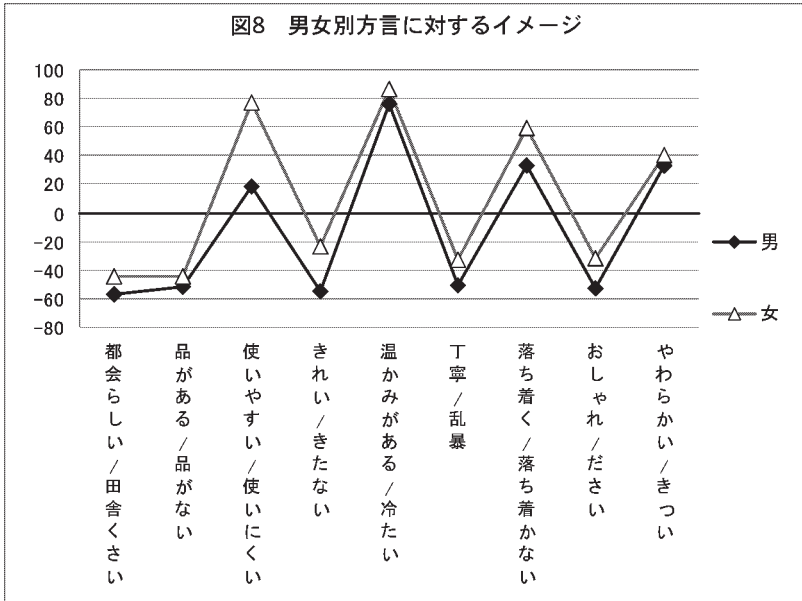
表6 方言に対するイメージについての質問形式

問11. ABどちらのイメージに近いか、あてはまる数字に○をつけてください。						
例：「A, 好き」か「B, 嫌い」かで“どちらかといえば好き”の場合						
A	Aに あてはまる	どちらかと いえばA	どちらで もない	どちらかと いえばB	Bに あてはまる	B
好き	1	②	3	4	5	嫌い

結果は、友定(1995)を参考に加点法を用い、「Aにあてはまる」には+2点、「どちらかといえばA」には+1点、「どちらでもない」には0点、「どちらかといえばB」には-1点、「Bにあてはまる」には-2点を与えて男女で比較をした。

全体で見ると、「田舎くさい」「品がない」「乱暴」「ださい」というマイナスイメージの割合が高い項目と、「使いやすい」「温かみがある」「落ち着く」「やわらかい」といったプラスイメージの割合が高い項目とに分かれる結果となった。図8の男女別のグラフで見ると、男子より女子の方が全体的にプラスイメージの方へ寄っていることがわかる。特に、「使いやすい/使いにくい」の項目については、男子が+18なのに対し、女子は+77と、その差が大きく開く結果となった。その他に、図から男女差が見られるのは、「きれい/きたない」「落ち着く/落ち着かない」「おしゃれ/ださい」の3項目である。それぞれ、男子より女子の方が20ポイント以上プラスとなっており、方言そのものに対

しても、前述の意識同様、男子より女子の方が好意的であることがうかがえる結果となった。

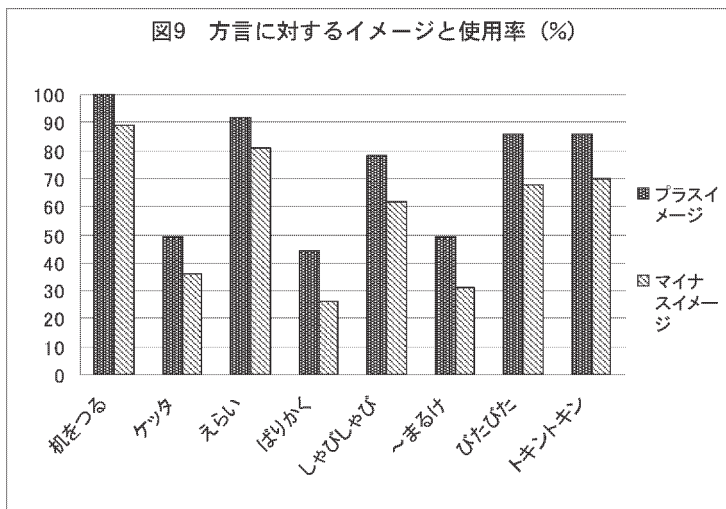


3.3.2. 方言に対するイメージと使用率

前述の方言に対するイメージ調査の結果を基に、方言に対するイメージが方言使用に影響を与えているかの分析を行った。先の結果からわかる通り、9項目の対になるイメージはプラスイメージに偏るものが4項目、マイナスイメージに偏るものが5項目となった。そのため今回の分析では、9項目の内4項目以上に対して「Aにあてはまる」「どちらかといえばA」と回答した対象者と、5項目以上に「Bにあてはまる」「どちらかといえばB」と回答した対象者の方言使用率を比較した。

結果は、22語中18語で差が生じ、その内の16語でプラスイメージを強く持つ回答者の方が使用率が高くなった。その中で、差が10%以上出た語彙は、「机をつる」「ケツタ」「えらい」「ばりかく」「しゃびしゃび」「～まるけ」「びたびた」「トキントキン」の8語である。図9にそれらの使用率を示す。

「机をつる」「えらい」は、元々全体としての使用率が90%前後と、かなり使用度の高い語彙である。プラスイメージの場合とマイナスイメージの場合とで使用率に11%の差



が生じた。8語の中で最も大きく差が出たのは「ばりかく」「~まるけ」「びたびた」の3語で、プラスイメージの場合とマイナスイメージの場合とではその使用率に20%近くの違いが見られた。

以上の結果から、方言に対して好意的なイメージを抱いている対象者の方が方言の使用率が高くなることが確認された。この結果は、男女の使用率の差に関係していると考えられる。まず、3.1.2.の方言使用率の比較において、男子よりも女子の方が全体的に方言使用率が高くなる傾向にあるという結果が出た。そして、3.3.1.で方言に対してのイメージについて比較したところ、男子よりも女子の方が「使いやすい」や「落ち着く」など、方言に対して好意的なイメージを強く抱いていることがわかった。つまり、今回の調査の結果、男女の方言使用率に差が生じた要因の一つとして、方言に対するイメージの差を挙げることができる。

4. まとめ

調査結果の分析考察から、以下のことがわかった。

まず、中学生全体の70%以上が出身地に対して好意的であり、出身地に方言があると思っっている対象者のうち半数近くがその方言を残していきたいと考えていることが確認された。方言に対するイメージとしては、“田舎っぽさ”や“品のなさ”，“だささ”などを感じている一方で、方言独特の“温かさ”や“やわらかさ”，“使いやすい”などを感じ

じているという結果となった。男女で比較してみると、総じて男子よりも女子の方が好意的な意識を持つ傾向が強かった。特に、方言に対するイメージに関しては、女子の方が“使いやすさ”や“落ち着く”といった感覚を強く抱くようである。そして、この方言に対するイメージは、方言使用に影響を与える要因となることが結果からわかった。

次に、場面ごとの方言使用についての調査結果から、男女とも家族や友人に対しての使用度が高く、見知らぬ相手に対しては使用を控える傾向にあることがわかった。特に、女子は家族に対して、男子は友人に対しての使用度の方が高くなった。また、愛知県の方言22語の使用度と認知度の調査結果から、「放課」「机をつる」「B紙」など、学校で使用される語彙は使用率が高く、「あらすか」「おそがい」「まわし」など、古くからある語彙は使用率が低くなることがわかった。全体的には、男子より女子の方が使用率が高くなることが確認された。そして、その要因として方言に対するイメージが関係していることがわかった。

最後に、言語環境に関する調査結果から、家族環境と高齢者との接触が中学生の方言使用及び意味理解に大きな影響を与えていることがわかった。特に、使用率の低い語彙の意味理解における影響は大きなものである。やはり、中学生という発達段階にある子どもたちにとって、周りの人々の存在は大きな影響となるものと思われる。

5. おわりに

今回、中学生を対象にした調査を行い、衰退していると指摘される方言が、親、祖父母世代から受け継がれ、今なお若年層の間で使用されているという実態が確認できた。また、調査の中で、出身地の方言が好きな理由として何人かの対象者が「おもしろいから」「個性があるから」などと答えてくれた。その答えは、大学4年間に方言を学んできた筆者にとって、とても嬉しいものであった。「ださい」「田舎くさい」などというマイナスイメージも確かに強いが、それ以上に「温かい」というイメージを方言に対して抱いてくれている中学生が沢山いたことも、この調査を行い良かったと心から思わせてくれるものであった。

最後に、本論文を執筆するにあたり、アンケートに回答して下さった中学生の皆さん、調査にご協力下さった豊明市内の学習塾の関係者の皆様、そして指導教員である篠崎晃一先生に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編（1983）『講座方言学 6—中部地方の方言』pp.207-241 国書刊行会
- 北元融教（1983）「方言と共通語の指導」『児童心理』37巻2号 pp.340-346 金子書房
- 勤勉亭親不孝（2002）『声に出して読んでゃあ名古屋弁 なごや調小咄集』すばる舎
- 尚学図書編（1989）『日本方言大辞典』小学館
- 友定賢治（1995）「関西弁は方言を容れさせるか」『言語 別冊』24巻12号 pp.122-135 大修館書店
- 藤原ゆう子（2002）「中学生の方言使用と意識—盛岡市における調査から—」『日本文学ノート』37号 pp.67-75 宮城学院女子大学日本文学会
- 山田敏弘（2007）「岐阜・愛知の若年層方言について I」『岐阜大学教育学部研究報告, 人文科学』56巻1号 pp.11-41 岐阜大学教育学部

参考資料

- 愛知県公式ホームページ <http://www.pref.aichi.jp/>
- 豊明市公式ホームページ <http://www.city.toyoake.aichi.jp/>

Abstract

This is a research study of the actual situation of dialect use and recognition among junior high school students in Toyoake city, Aichi prefecture. This study was conducted by surveying the students' language environment and consciousness of dialects and by investigating the factors that affect the image of the dialect.

The questionnaire consisted of 11 questions about language environment and consciousness of the dialect. 22 words were chosen to investigate the recognition and acceptance of dialects. The informants were 198 junior high school students in Toyoake, of which 111 were male and 87 were female.

As a result of the investigation, the words used in schools are also used frequently in the community and the recognition of those being dialectal words is low among the students. It was found that many students had negative images of dialects, while they felt that dialects have warm atmosphere compared with the standard Japanese and that they were useful. In addition, girls were more supportive of their hometown and its dialect and showed higher usage of dialects than boys.

The use of dialect was influenced by the amount of contact with the elderly and their likes and dislikes towards dialects. Contacts with old people influenced not only the use of dialect but also the understanding of them. It was also found that the family environment was likely to influence the use of dialect by students.